

日本文化政策学会 若手研究者交流セミナー 2021 年度発表申込

氏名：齋藤 梨津子 (ritsuko.saito@live.com)

所属機関：シンガポール国立大学大学院

(カルチュラル・スタディーズ・イン・アジア・プログラム)

発表タイトル：「生み育て」と文化政策の接点を再考する—ケア理論の視点から

発表要旨：

本発表は、日本における「生み育て」と文化政策の接点を整理し、芸術文化の公共性をめぐる議論とケアの理論を架橋する視点を提示することを目的とする。ケアとは、日本では狭義には、医療・福祉などの領域における「介護」ないし「看護」といった意味で使われ、中間的な意味として「世話」、広義では「配慮、気遣い」を意味する言葉として使われてきた（広井 2016,23）。他方、トロントとフィッシャーは、意図的に次のような広い定義を提示し、ケアに対する社会的評価が低く、もっぱら不利な立場にある者によって担われている現状を批判した。「ケアは人類的活動 a species activity であり、わたしたちがこの世界で、できるかぎり善く生きるために、この世界を維持し、継続させ、そして修復するためになす、すべての活動を含んでいる（トロント 2015=2020,24）」。日本の現状に即してみると、トロントらが目指す「共にケアする (caring with)」こと、すなわちケアに対する責任の平等な配分には程遠い現状がある。元橋 (2021, 3-4) は、1980 年代以降に始まる新自由主義的な潮流の中で生じた、生み育てのとらえ方の変化を「産み育ての自己責任化」と名づけた。こうした自己責任化のロジックを解体し、社会構造の問題として生み育てることを捉えなおし、取り組んでいく契機を、芸術文化の経済効果や地域活性化への貢献などの「外部性」ではなく、芸術文化そのもののもつ公共性（藤野 2011）の中に見いだせないだろうか。

日本では、文化政策と「生み育て」との接点が、極めて「自己責任化」のロジックに近い言葉で語られていることが問題と考えられる。もし「生み育て」の困難を個々の家庭の問題に帰し、個人の能力の向上によって自己解決を促す機会を提供するだけにとどまるならば、芸術文化が「生み育て」の当事者へ提供できる機会は、民間教育産業の提供する早期教育などの能力開発プログラムと大差ないものとなるのではないか。解毒された文化のみが安価に供給され、反省的能力を備えた芸術体験はお金でしか買えない状況が進めば、文化政策の公共性、「民主主義の構築という中心点」（藤野 2020, 20）から見出されうる人と文化の関係は、それを生み出すきっかけをも失うのではないか。

本発表はこうした問題意識に基づき、文化政策研究とケア研究の領域でこれまで蓄積されてきた論点を整理し、その道筋を見出そうとするものである。はじめに、日本社会における新自由主義的潮流の「生み育て」と文化政策への影響を論じた先行研究を振り返る。次に、「生み育て」と「文化政策」の接点を探るため、日本の近代化の歴史と文化政策の特徴を確認する。その後、文化政策研究にケアの理論のアプローチを用いる際の長所と短所を論じ、最後に、研究対象となりうる事例を紹介し、今後の研究の方向性を提示する。

参考文献

- ジョアン・C.トロント. 岡野八代訳. 2020. ケアするのは誰か: 新しい民主主義のかたちへ. 東京: 白沢社.
- 藤野一夫, 編. 2011. 公共文化施設の公共性: 運営・連携・哲学. 水曜社.
- 藤野一夫. 2020. 「『芸術文化は民主主義にとって必要だ』—パンデミック時代のドイツの文化政策」. 文化政策研究 14: 16–32.
- 広井良典. 2016. 「ケアの倫理と公共政策」. 社会保障研究 1 (1): 16–37.
- 元橋利恵. 2021. 母性の抑圧と抵抗: ケアの倫理を通して考える戦略的母性主義. 京都: 晃洋書房.